ふれ合い恐怖心性と親の養育態度が心理的ストレスに及ぼす効果

○石原俊一

(文教大学人間科学部心理学科)

キーワード: ふれ合い恐怖心性・養育態度・心理的ストレス

Effect of commu-phobic tendency and parenting attitude on psychological stress

Shunichi ISHIHARA

(Department of Psychology, Faculty of Human Sciences, Bunkyo University)

Key words: commu-phobic tendency, parenting attitude, psychological stress

目 的

ふれ合い恐怖心性に影響を及ぼす要因として、親子関係との関連についての指摘がされ、生育歴の聴取から得られた結果として、情緒的に乏しい養育体験を経てきたと訴える者が多かったと報告されている(伊藤, 2003)。また、学業への牽引が強いが、温かい言葉をあまりかけてもらえなかったこと、情緒的交流に乏しく、幼いころにおいて同年代の他者の輪に加わっていくための見本となるような関わりを示してもらえなかったことがあげられ、親子関係は対人恐怖傾向にも影響を及ぼすとされている(伊藤, 2003)。さらに、父親の権威力や強力性、母親の強力性や過保護が強く影響を及ぼすことが指摘されており、父親と母親の養育態度のいずれにしても共通して強力性が対人恐怖傾向に影響を及ぼしている(伊藤, 2003)。

また、対人恐怖症者は、抑うつ状態が高いことが指摘されているが、対人恐怖の心性が高い者も、自己に否定的な注意が向くことにより、抑うつが高い状態にあると考えられる(伊藤・村瀬・吉住・村上, 2008)。一方、ふれ合い恐怖の心性が高い者は、自分や他人に意識を向ける傾向や自分自身の内面的不安を感知する傾向が低いとされている(岡田, 1993, 2002)。これらのことから、ふれ合い恐怖の心性が、自己への注意を低下させ、抑うつ状態を低下させると考えられる(伊藤他, 2008)。

以上のことから、本研究では16歳までの養育者の養育態度とふれ合い恐怖心性との関連性を検討したうえで、抑うつなどの心理的ストレス反応についての関連性も検討する。

方 法

被調査者: 埼玉県内にある大学生に質問紙の回答を依頼し、同意を得られた男性79名(平均年齢19.91歳, $SD=1.168$)、女性181名(平均年齢19.43歳, $SD=1.030$)、合計260名(平均年齢19.59歳, $SD=1.092$)を分析対象者とした。本調査は、調査期間は2016年10月から2016年11月であった。

質問紙: (1) ふれ合い恐怖尺度 岡田(2002)が作成した、ふれ合い恐怖症に特有とされる対人的困難の特徴に関する26項目の尺度のうち、主成分分析で不採択となった3項目を除外した23項目を用い、ふれ合い恐怖尺度とした。得点が高いほどふれ合い恐怖的な傾向が高いとし、非常にそうでない—非常にそうであるまでの5件法で実施した。(2) 親の養育態度尺度 Parker, Tupling, & Brown(1979)が作成した Parental Bonding Instrument(PBI)は、子どもからみた養育者の養育態度を養護因子が12項目、過保護因子が13項目の25項目で構成している。養護得点が高いほど、ケア傾向が高く無関心や拒否の傾向が低く、過保護得点が高いほど過保護傾向が高く自立を促す傾向が低いとされている。本研究では小川(1991)によって作成された日本語版 PBI を用いた。非常にそうでない

—非常にそうであるの5件法で実施した。(3) 大学生用ストレス自己評価尺度 尾関・原口・津田(1991,1994)が作成した大学生用ストレス自己評価尺度を用いた。本尺度ではストレス反応35項目、ストレス源35項目、認知的評価15項目、コーピング14項目、ソーシャル・サポート10項目、ユーモア10項目の全119項目からなるが、本研究ではストレス反応尺度の35項目のみ抜粋して用いた。抑うつ、不安、怒り、情緒的混乱、引きこもり、身体的疲労感、自律神経系の活動性亢進の7下位尺度からなる。最近1か月の心身の状態や行動について、非常にそうでない—非常にそうであるの5件法で実施した。**手続き:** 同意を得られた対象者に質問紙を配布し、回答を依頼し、回収した。

結 果と考 察

親の養育態度尺度とふれあい恐怖尺度および大学生用ストレス自己評価尺度において因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行い、各因子得点を算出した。ふれあい恐怖尺度を従属変数、親の養育態度尺度を独立変数とする重回帰分析を行った。また、大学生用ストレス自己評価尺度を従属変数、ふれあい恐怖尺度を独立変数とする重回帰分析も行った。さらに、重回帰分析の結果を基に、モデルを構築し、共分散構造分析で検討した。重回帰分析結果をまとめると、親の養育態度における養護因子と、ふれ合い恐怖における対人拒否因子・孤独志向因子・傷心回避因子とのすべての間で有意な負の関連性が認められた。また、過保護因子と孤独志向因子・傷心回避因子との間で有意な負の関連性が認められた。この結果から、養育者が子どもと関わりを持つことがふれ合い恐怖になる可能性を低下させると考えられる。

また、ふれ合い恐怖心性における対人拒否因子と、ストレス反応における身体的疲労感因子・引きこもり因子との間で有意な正の関連性、自律神経系の活動亢進因子との間で有意な負の関連性が認められた。また、孤独志向因子・傷心回避因子と、抑うつ・不安因子・自律神経系の活動亢進因子・身体的疲労感因子・怒り因子・引きこもり因子・認知的混乱因子とすべての間で有意な正の関連性が認められた。重回帰分析を基に、モデルを構築し、共分散構造分析を行った結果、適合度は $GFI=.975$, $AGFI=.896$, $CFI=.987$, $RMSEA=.074$ となり、良好な値を示した。これらの結果から、対人関係における表面上の付き合いを維持するため、不機嫌さや怒りなどの感情の表出を抑制することから、心理的ストレス反応が上昇したと考えられる(石原, 2009)。今後の課題として、父親と母親についてのそれぞれの養育態度を検討することで、父親と母親におけるふれあい恐怖心性への影響の相違について、さらなる検討が必要であろう。利益相反開示; 発表に関連し利益相反開示; 発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはありません ある企業などはありません。